

赤い土器・白い土器を求めて —石川町大池下遺跡・古宿遺跡—

高橋 信一

1 はじめに

福島県は東北地方の最南端に位置し、南北に連なる阿武隈高地と奥羽脊梁山脈を境として東西の三地方に区分されており、東から「浜通り地方」・「中通り地方」・「会津地方」に分かれている。昭和50年（1975年）代から平成12年（2000年）頃まで、圃場整備事業・バブル景気による開発事業や高速交通網確立のため、様々な開発行為に伴う発掘調査が行われてきた。土師器の編年研究も、資料の増加と共に、数多くの報告・研究がなされてきた。

古墳時代の南小泉式期に限定しても、土師器杯や甕の変遷過程を軸としたものや器種構成の変化に注目したもの、他県との比較研究や研究史から導きだされた研究がある。その後、まとめた一般的な概説とに大別される^{（註1）}。

本論は、筆者が平成20年（2008年）から福島県文化財センター白河館（まほろん）に勤務し、研修や講座の講師として土師器の「南小泉式期」^{（註2）}を再度見直す機会があった。福島県の「南小泉式期」研究の原点となった国見町下入ノ内遺跡^{（註3）}の遺構や遺物を観察すると、当時気がつかなかった点が多々確認された。土師器杯の色調や朱塗りの有無・胎土の状況であった。筆者は、『研究紀要2012』において福島県の県北部を対象としたが、今回は県南部の塩釜式期から南小泉式期にかけての竪穴住居跡が検出されている石川町大池下遺跡^{（註4）}・古宿遺跡^{（註5）}の遺構や遺物（土師器のみ）を観察し、問題点を指摘していく。



図1 位置図（縮尺＝1/25,000）

2 石川町大池下遺跡・古宿遺跡

(1) 石川町大池下遺跡

【概要】 大池下遺跡は、石川郡石川町沢井字大池下に所在する。昭和49年（1974年）発行の『全国遺跡地図（福島県）』に散布地として登録されている。遺跡は、JR水郡線磐城石川駅より北西へ約4km離れた、標高295m前後の河岸段丘上に立地する。遺跡の南側には、県道白河石川線が走っている。周辺には、西ノ作C遺跡と上ノ原遺跡が所在する。現況は荒地と畑で、畑では蔬菜・牧草等が作られている。昭和61年（1986年）度に試掘調査が行われた。

【遺構・遺物】 図2の竪穴住居跡（1号住居跡）は、地表からの深さが浅く、耕作による破壊の危険があるため調査した。平面形は方形を呈し、東側半分は削平されており、西辺は4.3mを測る。検出面から床面までの深さは、西側で15cmである。堆積土は2層からなる。第1層は、暗茶褐色土で少量のローム土・ローム粒・炭化物を混入する。第2層は、壁の崩落土である。床面には、中央部と北側壁寄りの2ヶ所で焼土を検出した。また、地山黄褐色土（ローム土）上に粘質の暗黄褐色土による貼床が全面で確認された。床面の南西隅には、長径70cm・深さ37cmのP1がある。堆積土は3層からなり、中から土師器の小破片と共に、小型壺（4）と高坏片（3）・甑底部（10）が出土している。共に床面からの流れ込みと考えられる。小型壺は、口縁を斜め上方に向けた状態で、高坏は甑底部にかぶさる状態で出土している。

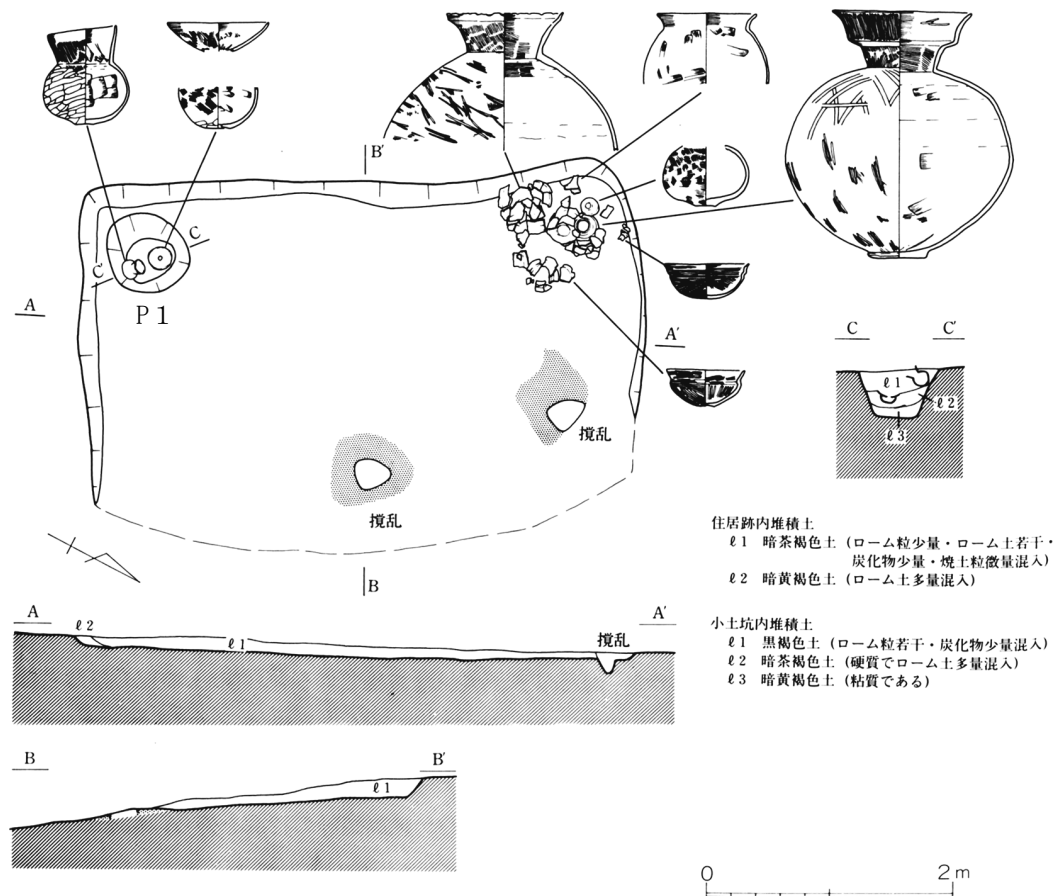


図2 大池下遺跡1号住居跡

この他に北西コーナーでは、一括資料も出土している。杯（1・2）は、壁面と集中部東側より出土している。大型壺（5）は口縁を床面にふせた状態でその上に底部以下体部がかぶさる形で検出されている。本来、床面に倒立していたものであろう。大型壺（12）は口縁を斜め下に向け体部上半が重なる状態で検出された。本来、口縁を壁側に向けて倒れた状態であったと推定される。体部下半は耕作による削平のため欠落したと考えられる。小型壺（8）は、口縁部を欠損しており、下向きの状態で検出した。甕（9）は、壁面下に破片となって出土している。遺物番号は、図3・図4の通し番号とした。

杯 1は丸底で、口縁部は内外面に不明瞭な稜線を残して断面S字状を呈する。2は体部上半がくびれ、内湾気味に開き口縁部がつく。

調整は、外面に口縁部がヨコナデ、体部下半はヘラケズリ後に丁寧なヘラミガキが施されている。内面は全面にヘラミガキが施されている。1の色調は、体部下半が黒色、口縁部が灰褐色を呈する。胎土は緻密で細砂粒を混入する。2の色調は、体部が黒色、口縁部が茶褐色を呈する。胎土は、緻密で白色針状物を微量混入する。搬入品の可能性が高い。

大型壺 5・6・7・12は、有段口縁の大型壺である。5の体部は、ほぼ中位に胴部最大径を持ち、わずかに肩が張る形態を呈する。頸部は外傾し、口縁部との境界に段を有する。6・7は頸部上半から口縁部までは、ともに外反気味に開く形態を呈する。また、境界の段には、輪積み成形時の痕跡が明確に残っている。12は有段口縁の壺で、体部下半は欠落している。頸部は外反気味に開き、口縁部は短く、直立気味に外反する。また、口縁部は意図的に打欠かれており、一見波状を呈する。口唇の一ヶ所には、短い押圧痕がみられる。

5の調整は、外面に体部が丁寧なヘラミガキと所々にハケメとナデが観察される。また上半には、籠目が僅かに残っている。内面は、口縁部にヨコナデとヘラミガキ、頸部にハケメが、体部にはハケメとヘラナデが施されている。内外面に朱彩が施され、胎土には小砂利が混入する。他は内外面にヨコナデ・ハケメ・ヘラミガキが施され、5を除き色調は灰褐色を呈し、胎土に砂粒を含む。

小型壺 4は球形の胴部に内湾気味に外傾する口縁部と頸部がつき、8の体部の内外面には朱彩が施された下膨みの壺である。調整は、外面にヨコナデ・ハケメ・ヘラケズリが、内面にはヨコナデ・ヘラナデが施されている。4の色調は灰褐色を呈し、胎土に砂粒を含む。

高坏 3は内外面に朱彩されており、脚部を欠落している。調整は、口縁部内外面にヨコナデが、体部の内外面にはハケメやヘラミガキが施されている。胎土に、雲母と砂粒が混入する。

甗 10は体部上半のみが残存し底部中央に径1cmの焼成前に穿たれと考えられる小孔がある。調整は、外面にハケメ・ケズリ、内面にヘラナデが施されている。色調はやや赤味を帯び、胎土断面は鉄分を含み、赤褐色系土器に近い。

甕 9・11は、肩のはらない胴部から口縁部が、外反気味に開く形態を呈する。口縁部には内外面にヨコナデが施され、胴部には内外面にナデが施されている。色調は褐色を呈し、胎土には細砂粒を混入する。

【まとめ】 出土した土師器から本住居跡は、塩釜式期と考えられる。

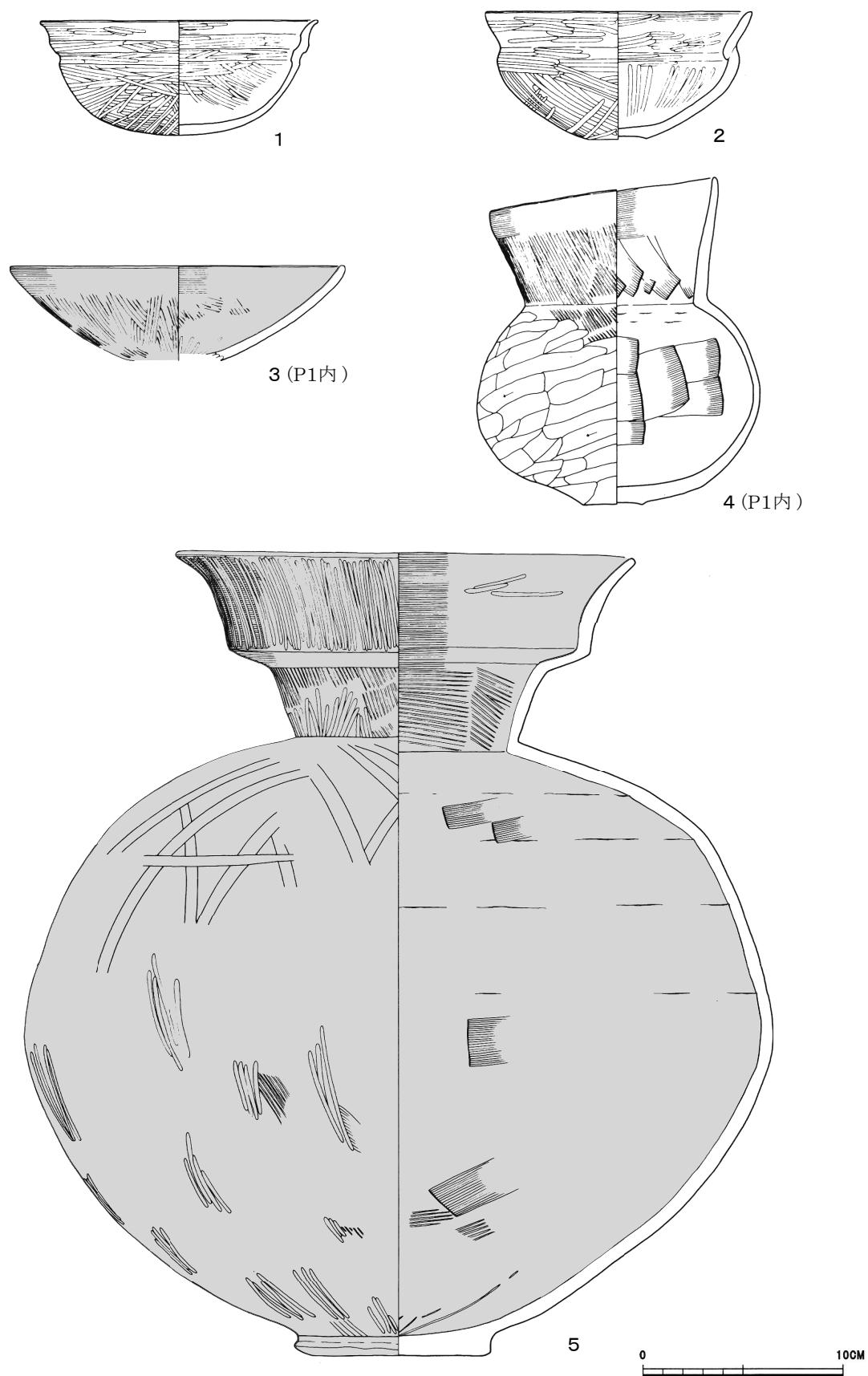


図3 大池下遺跡1号住居跡出土土師器(1)

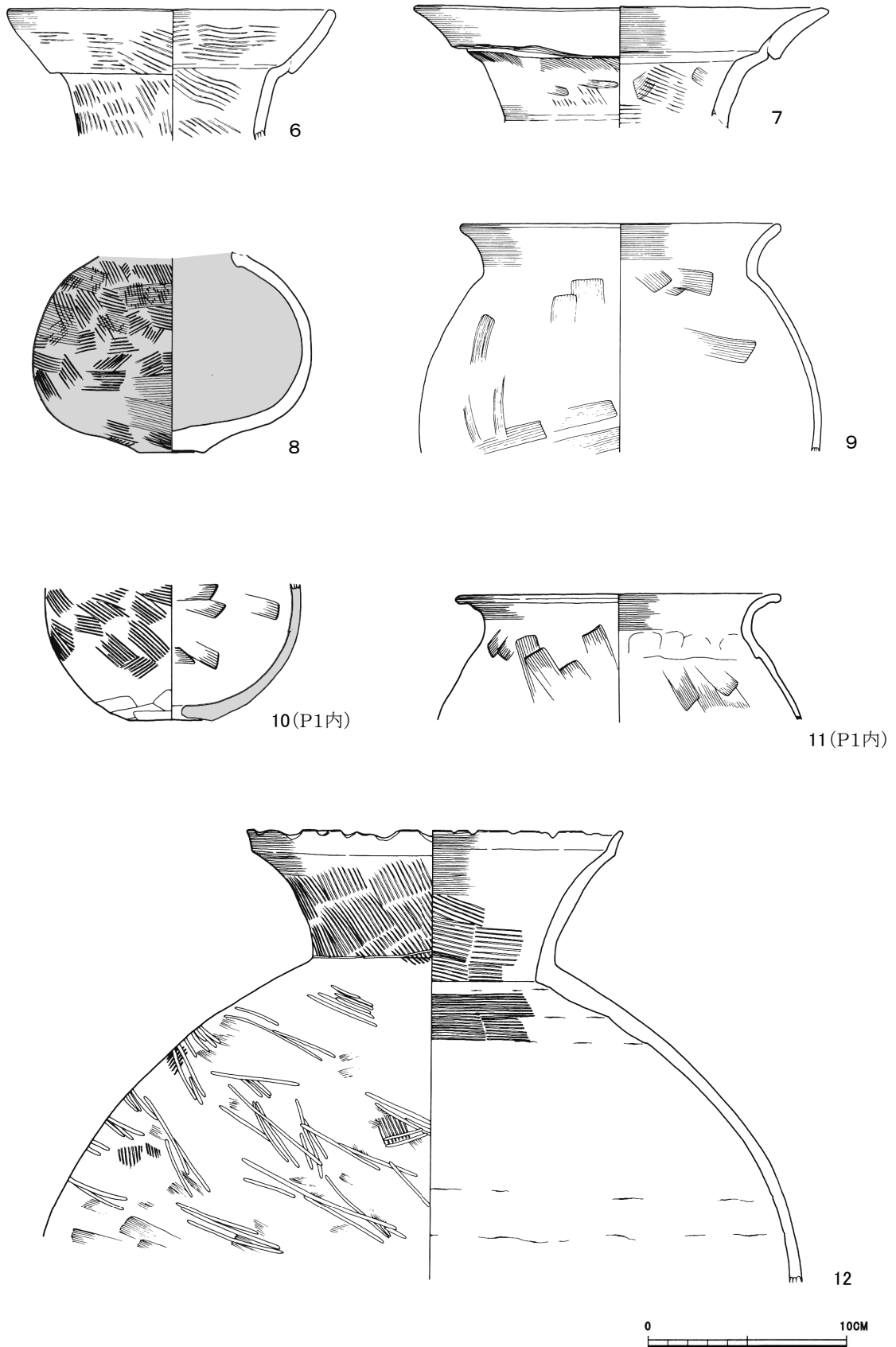


図4 大池下遺跡 1号住居跡出土土師器 (2)

（２）石川町古宿遺跡

【概 要】 古宿遺跡は、石川郡石川町大字赤羽字達中久保・陣場・馬舟沢・古宿・十三塚に所在する。本来は、達中久保・陣場・馬舟沢・古宿・十三塚の５つの字にまたがって、東西約 0.5km、南北約 1.3km の範囲にわたり、一つの集落遺跡と考えられているが、便宜的に字界で遺跡名を分割している。昭和 62 年（1987 年）度の発掘調査では、最も調査範囲が広く、かつ遺構が多数検出されたのが字古宿地内であった。このため、５遺跡の総称を古宿遺跡とし、各調査区は達中久保遺跡（Ⅰ・Ⅱ区）、陣馬遺跡（Ⅰ・Ⅱ区）、馬舟沢 B 遺跡（Ⅰ～Ⅲ区）、古宿遺跡（Ⅰ～Ⅶ区）と仮称した。

現況は、集落及び畑地・桑畑・果樹園として利用され、生産性の高い地区として知られている。JR 水郡線磐城石川駅より北西へ約 5 km 離れた、標高 295 m 前後の河岸段丘上に立地する。

【遺構・遺物】 当初、幅 2 m の調査区であったが、古宿遺跡（Ⅱ区）堅穴住居跡の全様を把握するために北側に 7 × 8 m の範囲で拡張した。図 5 の住居跡は東側を 1 号溝跡（SD01）、西側を 3 号溝跡（SD03）、中央部を土塁構築時の削平をそれぞれ受けている。確認面は第Ⅲ層黄褐色土（ローム）上面であるが、土層の検討から第Ⅱ層中位から掘り込まれていた。

平面形は、北西壁の長さ 8.26 m、南西壁の長さ 8.1 m を測り、ほぼ方形を呈する。堆積土は 5 層に分かれる。第 1 層は土塁構築時の削平・盛土で、色調・含有物の有無によってさらに細分される。第 1a 層はローム粒・パミスを含む黒褐色土、第 1b 層はローム粒・パミスを含む暗褐色土、第 1c 層はロームと黒褐色土の混合土である。第 2 層は住居の南東部分に分布する床面直上土で、焼土粒・木炭粒を含む黒褐色土である。第 3 層は住居の北西から北東にかけて分布するローム粒を含む暗褐色土である。第 4 層は南東壁際に堆積し、ローム粒を含む暗褐色土である。第 5 層は壁溝の堆積土で黒褐色土である。壁は北東壁から南東壁を 1 号溝跡、北西壁と南西壁の中央を 3 号溝跡（SD03）によって破壊されている。壁面は保存状況の良好な北西壁や南西壁では急傾斜で立ち上がり、壁高は 20 ～ 35 cm を測る。壁溝は 1・3 号溝跡によって破壊された部分以外で確認された。壁溝は全周していたと推定され、幅 15 ～ 42 cm、床面からの深さ 10 cm 前後を測る。また、壁溝に連続して、9 本の間仕切り溝跡が確認された。全長 100 ～ 120 cm、幅 20 ～ 35 cm、深さ 10 ～ 15 cm を測る。床面はロームと暗褐色土の混合土を 4 ～ 10 cm の厚さに貼床している。また、床面上には木炭や焼土が散乱していた。

炉跡は住居中央より北西壁寄りに検出された。住居床面を 68 × 95 cm の範囲で、深さ 10 cm ほど浅く掘りくぼめてある。炉跡の底面は東側が 2 ～ 4 cm の厚さで焼土化していた。堆積土はローム粒・焼土粒・木炭粒を含む黒褐色土である。また、炉の北側には長さ 30 cm の河原石が配置されていた。炉石と推定される。

ピットは、総数で 24 個検出された。P8・P11・P13・P14 は住居跡内の位置や形状から柱穴と推定される。P3・P7・P17 は住居跡のコーナー部に位置する貯蔵穴ピットである。P5・P6・P16 も貯蔵穴状ピットと推定される。検出されたピットの中で、P16・P17 は人為的に埋め戻されており、P17 の床は焼けていた。P9・P12・P18 ～ P24 は間仕切り溝跡の先端に位置しており、支柱穴と推定される。柱穴状ピットの堆積土は総て焼土粒・木炭粒・ローム粒を含

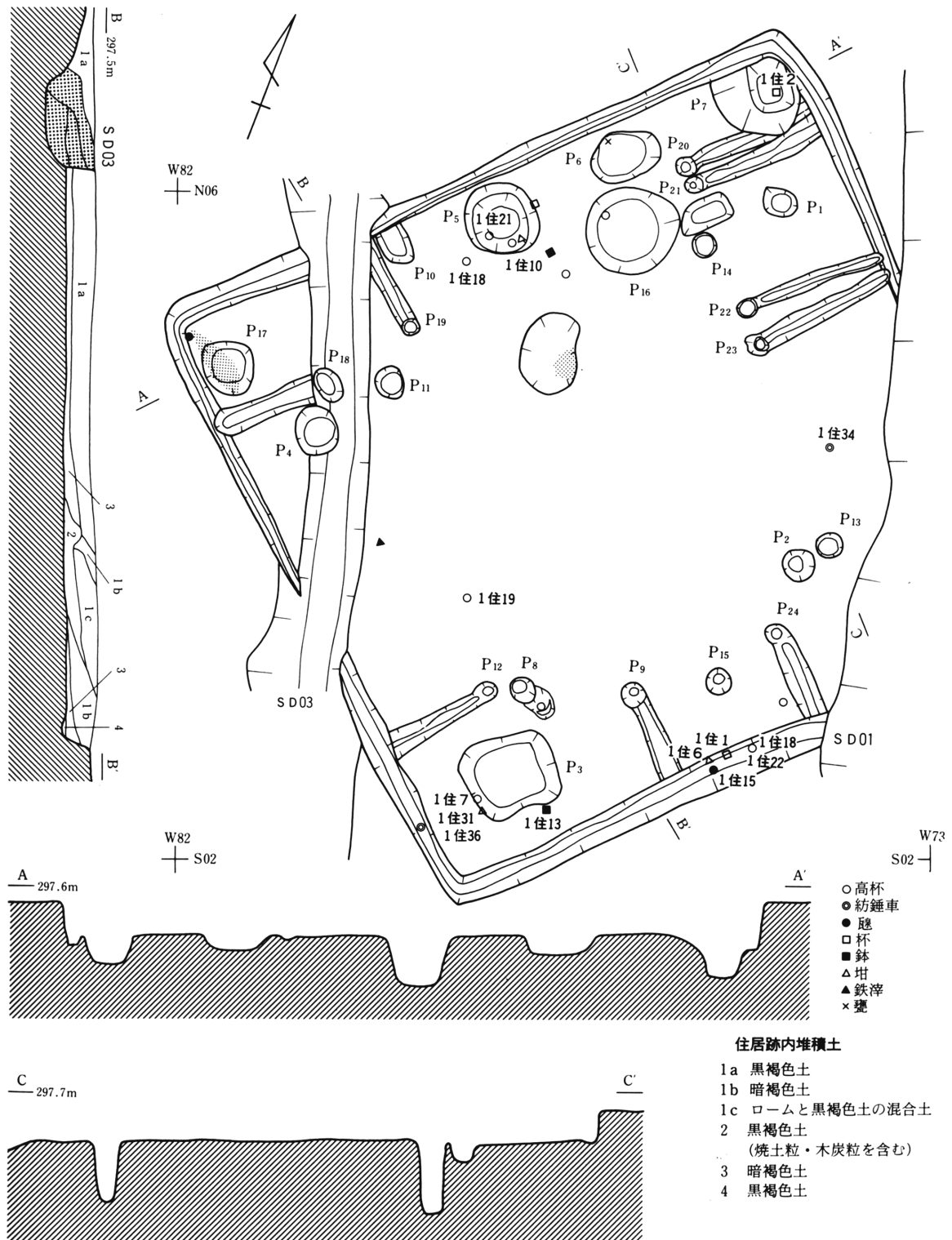


図5 古宿遺跡（Ⅱ区）1号住居跡

む黒褐色土である。柱痕等は確認されなかった。遺物は、堆積土・床面・P3・P5・P6・P7・P16・P17等から破片の状態で出土している。この中で、P3・P5周辺の床面からは比較的まとまって出土した。遺物番号は、図6～8の通し番号とした。

杯 1～5・7・9で、1は上げ底気味の底部を持ち、口縁部は大きく外反する。5・7は丸底の底部を持ち、口縁部下に括れが認められる。2は丸底の底部を持ち、口縁部は大きく外反する。3は平底風の底部を持ち、口縁部下に明瞭な括れが認められる。11は丸底の底部を持ち、口縁部は直立気味に立ち上がる。3・6は平底で、口縁部下で括れ外反する。4・9は底部が欠損している。

調整はほぼ同一である。口縁部の内外面はヨコナデを主に、一部にヘラミガキを、体部から底部にかけての外面はヘラケズリ・ヘラミガキ・ナデ・ハケメを、内面は放射状のヘラミガキ・ナデを施している。3は底部外面にもハケメが施されている。1・3・7～9・11は赤褐色系土器で5は朱彩が施されている。

埴 12～14で、12・13は口唇部・口縁部を欠損している。12・13は体部下半に最大径を持ち、算盤玉に近い形態を持つ。14は、口縁部内外面にヨコナデ・口縁部から体部上半に外面はハケメ、内面はヘラナデを、体部下半にはヘラケズリをそれぞれ施している。12・13の調整はヨコナデ・ヘラナデ・ヘラケズリを施している。13・14は、赤褐色系の土器である。

小型鉢 17は、上げ底気味の底部から丸味を持って立ち上がり、口縁部で内湾する。口縁部下には0.5cmの孔がある。器面の調整は、口縁部内外面にヨコナデ、体部外面にはヘラケズリ、体部内面にはヘラナデを施す。色調は褐色を呈する。

椀 6・8・10で、6は平底の底部から開き、口縁部下で若干の括れを持ち外反する。8は平底を呈し、中央部は上げ底である。体部は球体気味で、口縁部は短かく外反する。6・10の器面調整は、口縁部内外面にヨコナデ、体部外面にヘラケズリ、体部内面にヘラナデを施す。10は平底を呈し、体部から口縁部にかけて内湾しながら立ち上がる。器面の調整は、口縁部内外面にハケメ、体部外面にハケメ・ヘラケズリ、体部内面にハケメを施す。3点共に赤褐色系の土器である。

甕 15の1点を図示した。口縁部を欠損し、器形は堆形を呈する。器面調整は、体部外面にハケメ・ヘラケズリ、体部内面にヨコナデ・ヘラナデを施す。赤褐色系の土器である。

高坏 18～29・31の13点を図示した。18～22以外は、高坏の坏部・脚部・裾部の破片を図示した。18は土師器杯に円錐台状の脚部を持つ。19・20・22は坏部が直線的に完形である。18・22・23～29・31は赤褐色系の土器である。

甕 30は小型な甕、32・33は球体気味を呈する甕である。調整は、内外面にヨコナデ・ヘラナデ・ハケメ・ケズリを施し、32・33は赤褐色系の土器である。

その他 この他に紡錘車や砥石が出土している。2点の土製紡錘車や1点の滑石製紡錘車がある。砥石はP5堆積土から出土した片岩質の砥石がある。

【まとめ】 出土した土師器から本住居跡は、南小泉式期と考えられる。

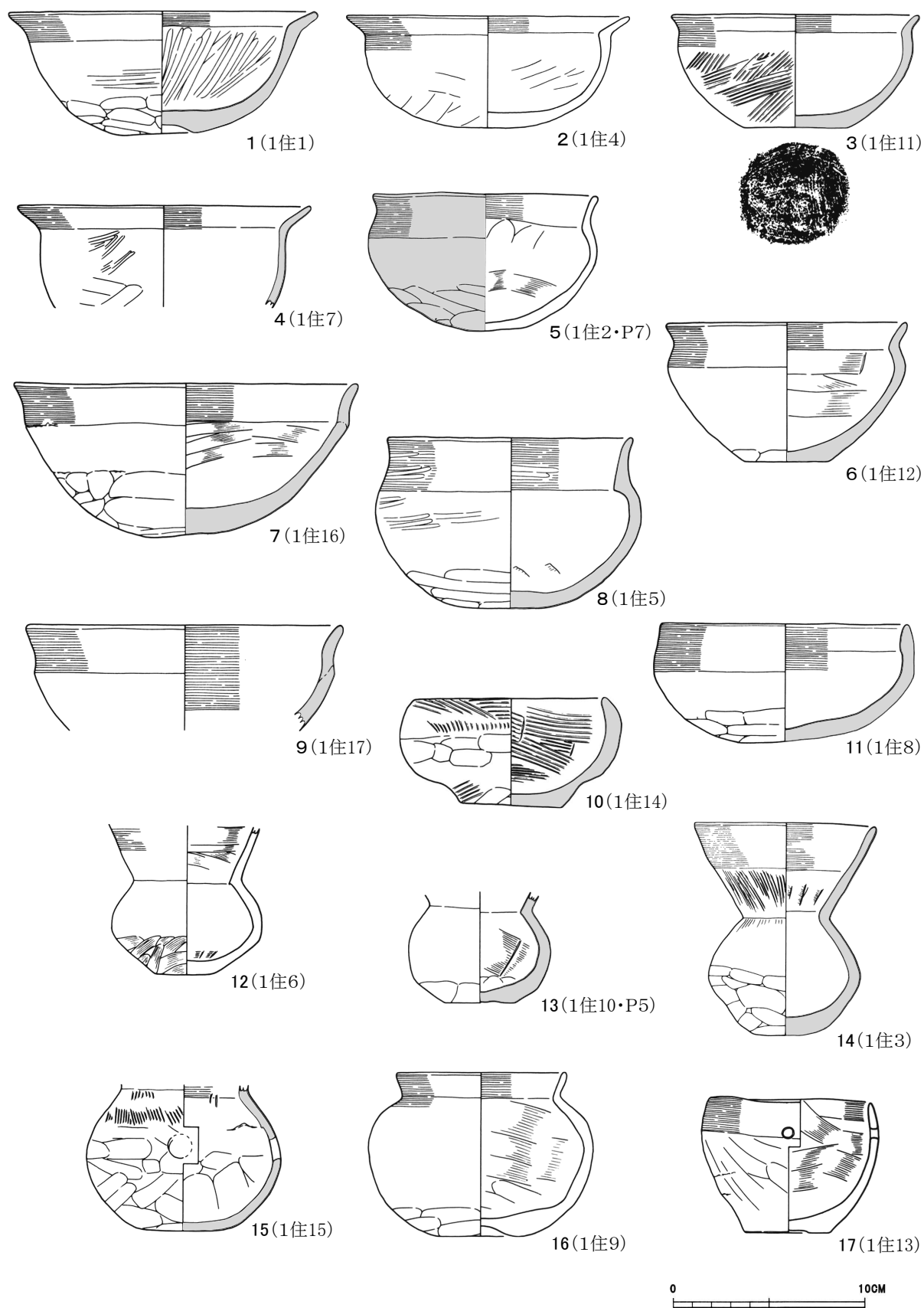


図6 古宿遺跡（Ⅱ区）1号住居跡出土土師器（1）

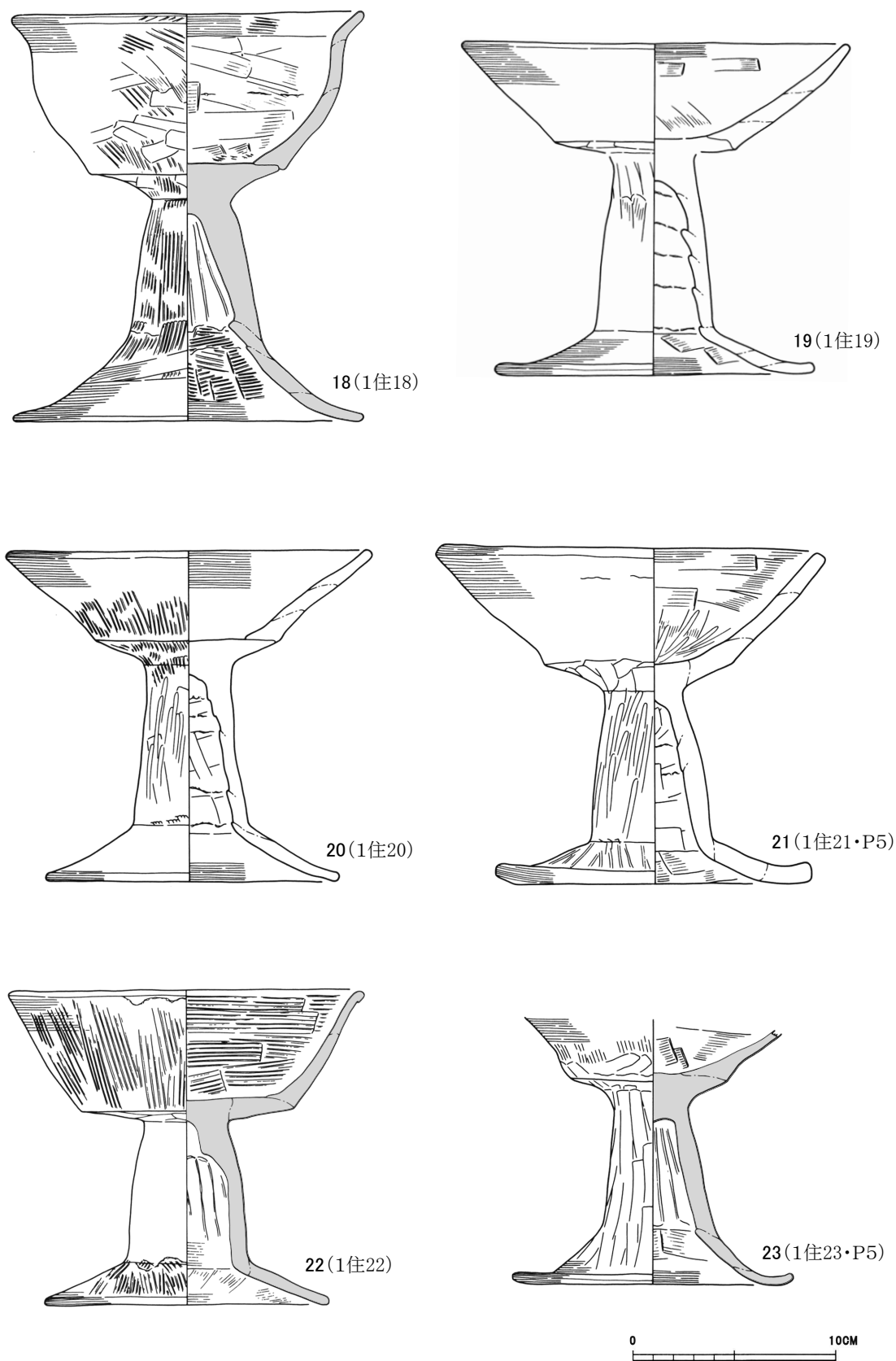


図7 古宿遺跡（Ⅱ区）1号住居跡出土土師器（2）

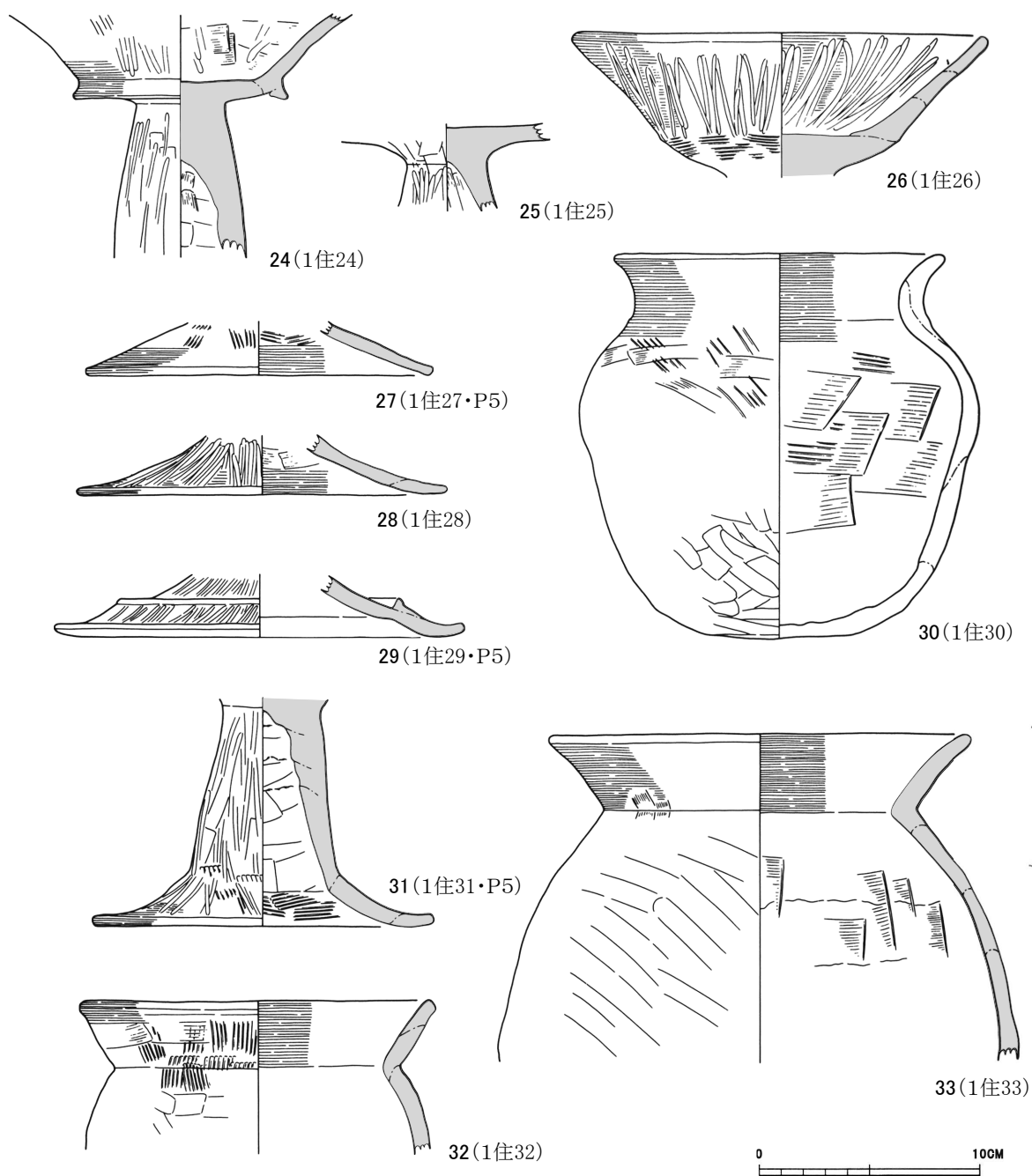


図8 古宿遺跡（Ⅱ区）1号住居跡出土土師器（3）

3 資料の分析

（1）土師器のつくり方

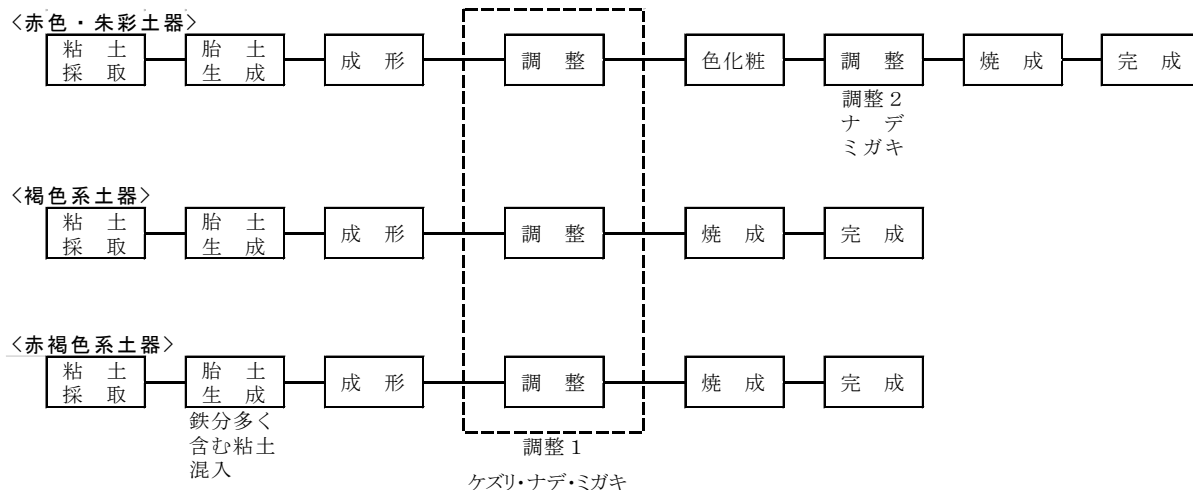
土師器は、一般に弥生土器の伝統を汲み、古墳時代～奈良・平安時代まで生産された素焼きの土器である。この土器は、小さな焼成坑を地面に掘り、密閉性はなく、800～900度の酸化焰焼成によって焼き上げられている。

南小泉式期土師器の杯や甕は、国見町下入ノ内遺跡^{（註6）}の検討から赤褐色系土器（赤い土器）・灰褐色系土器、そして灰褐色系土器に朱塗りを施した、三系統の土器の存在が明らかになってきた。また、保原町宮下遺跡^{（註7）}や天栄村舞台遺跡^{（註8）}から出土した赤褐色系土器（赤

い土器) について製作工程を次のようにまとめられる。

器面及び断面の赤褐色系については、胎土生成の段階で酸化鉄を含む「赤い土」を混入して焼成すれば、赤褐色系土器が完成する。

表 1 土師器の製作工程



(2) 基本的な分類

A類：体部は球体を呈し口縁部は「く」の字状に外反する。B類：体部は卵形を呈し、口縁部は直立する。壺形土器に近い形態をとる。C類：体部は長胴気味になり、口縁部は「く」の字状に外反する。今回、観察した土師器を形態的には、底部と口縁部の括れから下記の表2に分類した(註9)。

表 2 土師器杯の分類(形態的な分類)

分類1	群	底 部	分類2	類	特 徴
	A	平 底		I	口縁部は短く外傾し、内外面に明瞭な括れが認められる
	B	平底風		II	口縁部は短く外傾し、内外面に明瞭な括れは不明瞭である
	C	丸 底		III	口縁部は直立気味を呈し、内側に稜が認められる
				IV	体部から口縁部まで丸味を持ち立ち上がり、口縁部は内弯する

さらに、色調や胎土・朱彩の有無から三種に細分(表3参照)した。灰褐色系の土師器は、粘質の高い粘土などに埋没している時に、水分の影響で器面の表面変化や剥落が考えられてきた。しかし、器面や断面の観察を通して、最初から灰褐色系の土師器であったことが確認されている。この上に、朱彩が施されている。

表 3 胎土及び色調の分類

表

類	特 徴
a	器面に朱彩が施された土器(朱彩土器:丹塗土器)
b	器面の色調が灰褐色を呈し、砂粒が浮上している土器(白い土器:灰褐色系土器)
c	器面の色調と断面の外側が赤褐色を呈している土器(赤い土器:赤褐色系土器)

2・3を組み合わせ、土師器杯を分類すると以下のように確認される。同時代と考えられる国見町下入ノ内遺跡1号住居跡や石川町古宿遺跡から出土した土師器を観察すると、朱彩・胎土に酸化鉄を含み土器断面や器面が赤褐色を帯びるもの、そして褐色の三系統の土師器の存在が確認された。残念ながら石川町古宿遺跡では、灰褐色系土器は確認することができなかった。灰褐色系土器とは異なり、器面の丁寧な調整を加えられたやや茶味を帯びた褐色系の土器であった。このため、塩釜式期の集落遺跡である石川町大池下遺跡や西郷村道南遺跡^(註10)に灰褐色系土器が確認されており、県南部ではこの時期に終了する。

表4 総合的な分類

A I a	○	A II a	—	A III a	—	A IV a	○
A I b	—	A II b	—	A III b	—	A IV b	—
A I c	○・△	A II c	○	A III c	—	A IV c	—
B I a	—	B II a	○	B III a	○	B IV a	○
B I b	△	B II b	—	B III b	—	B IV b	—
B I c	—	B II c	—	B III c	△	B IV c	—
C I a	○	C II a	○	C III a	○	C IV a	○
C I b	—	C II b	—	C III b	—	C IV b	—
C I c	—	C II c	—	C III c	—	C IV c	—

○：国見町下入ノ内遺跡 △：石川町古宿遺跡

塩釜式期から南小泉式期かけての集落遺跡である石川町大池下遺跡・古宿遺跡出土土師器について観察・検討を加えてきた。大池下遺跡には、赤褐色系土器（赤い土器）・褐色系土器、そして褐色系土器に朱彩を施した、三系統の土師器の存在が明らかになってきた。同じく古宿遺跡には、赤褐色系土器（赤い土器）・褐色系土器、そして褐色系土器に朱彩を施した、三系統の土師器の存在が明らかになってきた。この2遺跡の検討から、赤褐色系土器の初源は塩釜式期に、南小泉式期には、三系統の土師器が共存している。色調や胎土の観察から、三系統の土師器が確認されてきた。しかし、県南部では県北部と異なり、灰褐色系土器（白い土器）は、塩釜式期で終了し、褐色系土器に変化していくことが確認された。

「南小泉式期」には、赤褐色系土器（赤い土器）・褐色系土器、そして褐色系土器に朱彩を施した、三系統の土師器の存在が県南部にも存在することが確認された。しかし、報告書には、朱彩や赤褐色系土器があっても、褐色系土器の記載は少ない。赤褐色系土器の確立期が天栄村舞台遺跡^(註11)の時期前後とすれば、「所謂引田式期」の指標になる可能性が高く、報告もあり方も検討課題となろう。

また、「塩釜式期」から「南小泉式期」の土師器を検討してみたが、色調や形態も福島県内にも様々な様相があることが看取することができた。地域差を考える上で、「国造」^(註12)単位の支配範囲を一つの地域と考え、土師器の色調や形態から検討することも、重要であると考ええる。様々な土師器杯のバリエーションが地域圏として完結する可能性を指摘しておきたい。

4 おわりに

福島県文化財センター白河館（まほろん）には、福島県教育委員会が発掘調査した遺跡の出土品 48,189 箱（平 25.4.1 現在）や、調査写真・図面等の記録を一括して収蔵している。前回に引き続き、石川町大池下遺跡・古宿遺跡出土の土師器を改めて観察することにより、器面の色調・胎土・朱彩は「塩釜式期」・「南小泉式期」・「引田式期」を考える上で、重要な視点になると考えた。このように、時代と共に研究の方法も変化し、遺物を観察する視点も異なってくるため、今回の視点を援用し、再度当該期の土師器を観察し直すと、「塩釜式期」～「引田式期」の土師器研究の新たな方向性を示すことができると考えられる。

また、最近の報告書を閲覧すると、一定の基準で報告がされているが、調査者の問題意識や土師器の色調や胎土についての記載が少ないような気がする。様々な情報の源である遺構・遺物の報告については、細心の注意が必要であり、研究史の疑問が解ける鍵を握っている。

< 註 >

- （註 1）東北地方の古墳時代中期（南小泉式期）に関連した文献は、拙稿（2013 「国見町下入ノ内遺跡の土師器―赤い土器と白い土器―」『福島県文化財センター白河館研究紀要 2012』）にまとめた。
- （註 2）前掲註 1 参照。
- （註 3）前掲註 1 参照。
- （註 4）福島県教育委員会 1987 「大池下遺跡」『国営総合農地開発事業 母畑地区遺跡分布調査報告 11』石川町 2006 「大池下遺跡」『石川町史 第 3 巻 資料編 考古・古代・中世』
- （註 5）福島県教育委員会 1988 「古宿遺跡」『国営総合農地開発事業 母畑地区遺跡発掘調査報告 25』石川町 2006 「古宿遺跡」『石川町史 第 3 巻 資料編 考古・古代・中世』
- （註 6）前掲註 1 参照。
- （註 7）保原町教育委員会 2005 「宮下遺跡」『保原城跡Ⅳ・宮下遺跡・大地内 A 遺跡』
- （註 8）天栄村教育委員会 1981 『舞台遺跡―福島県天栄村における古墳時代集落跡の調査―』
- （註 9）土師器杯の形態的な分類は、（1983 「阿武隈川流域における古墳時代中期の土師器とその問題」『しのぶ考古 8』しのぶ考古学会）を参照。
- （註 10）福島県教育委員会 1981 「道南遺跡」『東北新幹線関連発掘調査報告Ⅰ』
- （註 11）前掲註 8 参照。
- （註 12）東山道に属する陸奥国南部（現在の福島県内）には、会津・耶麻郡を除き菊多郡（道奥菊多国造）磐城郡（石城国造）、標葉郡（染葉国造）、行方・宇多郡（浮田国造）、白河郡（白河国造）、岩瀬郡（石背国造）、安積郡（阿尺国造）、信夫郡（信夫国造）の国造が『国造本紀』に記載されている（1993 『福島県の地名（日本歴史地名体系 7）』平凡社）。

【挿図・表出典】

- ・図 1 …筆者作成。
- ・図 2 ～ 4 …註 4 文献より転載・加工して作成。
- ・図 5 ～ 8 …註 5 文献より転載・加工して作成。
- ・表 1 …註 7 文献より転載・加工して作成。
- ・表 2 ～ 4 …註 1 文献より転載・加工して作成。